
Metamorphose

ライラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e t a m o r f o s e

【Nコード】

N 1 7 8 3 N

【作者名】

ライラ

【あらすじ】

あらすじ：今時の女子高生、美鈴は代り映えのない日常をたんとと過ごしていた。やりたいことも分からず、ただまわりに流されてばかり彼女。そして、みつけた不思議なお店「Sanctuary」で働くことになる。そして、少しずつ彼女の人生が変わっていく。ライトノベルファンタジー。

あらすじ

あらすじ：今時の女子高生、美鈴は代り映えのない日常をたんたんと過ごしていた。やりたいことも分からず、ただまわりに流されてばかり彼女。そして、みつけた不思議なお店「Sanctuary」で働くことになる。そして、少しずつ彼女の人生が変わっていく。ライトノベルファンタシー。

登場人物

ネタバレ

メインキャラ

高瀬 美鈴：16歳。「Sanctuary」でバイトを始める。常に周りに合わせて暮らしてきたが実は活発で芯の強い子である。元の黒髪はセミロングで茶髪に染め、耳にピアスを2つもつけている、いまどきの女子高生。両親をすでに亡くし、3人の兄と暮らしている。

美馬 浅香：年齢不詳。「Sanctuary」の主。自評「魔女」。小柄で可愛い笑顔の絶えない癒し系美人。物静かで美鈴のよき理解者。

メリーナ・マツカーサー：金髪でグラマーな謎の美人。「Sanctuary」の常連さん。美鈴をかわいがっている。美鈴がバイトをする切欠を作った人。

東野 柚月：20歳。帰国子女の女子大生の先輩アルバイト。ボーイッシュでさばさばした美人。美鈴のあこがれの女性。

ケント・シー：美馬家に暮らすしゃべる謎の黒猫。生魚より猫缶のマグロが好き。美鈴とは犬猿の仲。

高瀬家の家族

高瀬 満^{みつる}：美鈴の長男の兄。26歳。高瀬家の家長。二年前に亡くなった父の経営していた小会社を継いだ。しっかりとした頼もしいお兄様。真面目だが、ユーモラスな人でもある。不器用で家事の才能はなく、弟たちから何もするなと止められている。

高瀬 港^{みなと}：美鈴の兄。次男。24歳。頭脳派で物腰柔らかな美青年。高瀬家の家事を任されている。仕事はフリーライター。写真と読書と科学研究（？）が趣味の変わり者。家族からは「奇人」と秘かに呼ばれている。

高瀬 陽^{みなみ}：美鈴の兄。三男。20歳。スポーツ万能の体育系の青年。名前とは裏腹にクールで大柄のため女子からは怖がられている。以外にピアノが得意で、現在は音大の指揮科に所属。趣味は料理。港と二人で食事当番を務めている。

シーザー（♂）：高瀬家の愛犬。普段はおとなしく吠えることはない。御客さんが来ると主人より客のほうへ行ってしまうサーヴィス旺盛な犬。

美鈴の友人

麻生 綺羅・沙羅：隣に住む幼馴染。主人公とは学校が違う、二卵性の双子の姉妹。同じ顔、同じ髪型に同じ服を着るので誰もが混乱

する。今では人気アイドル・タレント。

冬木 瑠璃：クラス別の主人公の幼馴染。学校1の秀才で生徒副会長。普段かけている眼鏡が地味に見せているが、実は隠れ美人。喧嘩をしたわけではないが、美鈴が周りに流されギャルの子たちと歩き始めた頃から距離を置いて見守っている。

美鈴の同級生

朝井 真理：ロングの髪を茶髪に染め、カラコンと化粧が欠かせないギャル風の女子高生。学校では抱いてみたい女No.1。

神埼 梨香子：黒く長い髪を先だけカールさせ、リボンで縛っている。お譲さま系のギャル。朝井に続いて、彼女にしたいNo.1。

久城 由梨：ふわふわと綿菓子のような可愛い系。「由梨、わかんない。？」が口癖。単純な男はそれに引っかかる。ぶりっこ。守ってあげたいNo.1。

後その他

天羽 律：美鈴の三男の兄の親友でよく高瀬家に訪れる。明るく、自然と人をひきつけるさわやか青年。ボランティア精神が強く、将来は貧しい子供を救える仕事に就きたいと思っている。現在、柚月の通う大学の同級生。趣味はピアノとアコースティックギターと作曲。

レン：たまに店に訪れる不思議な客。シルバーグレイの髪にアイスブルーの瞳をもつ魅力的な男性。見た目は青年実業家。

美馬さん：外見年齢30代後半。名前と仕事の不明な浅香の御主人。

常にサングラスをかけているため顔がわからない。一見、危ない人に見える。普段は家をあけているため、滅多に現れない。

0・不思議なお店（前書き）

この小説ではほのぼの、時に切なく、ちょっぴりコミカルを目指しています。恋愛と言うより友情ロマンスがメインになります。

0・不思議なお店

日本、東京都心の一角、毎朝霧が出る通りがある。その通りは不思議な店がずらりと並んでいる。店のドレもが可愛らしくできていて、どこかノスタルジックを感じる。その中に赤い煉瓦の屋根の白い扉と白い窓淵、窓際にはレースの白いカーテンがゆらりと揺れている店が目立っている。名前は「Sanctuary」。

『さあ、いらしゃい！我が店へ・・・』

チリンと鈴の音が聞こえた。

美鈴は振り返った。気づくと美鈴の周り一面は濃い霧で覆われていた。

「あれ？霧？なんで？」

目をこすつてもう一度見渡すと少しずつ霧がはれ、見知らぬ路上に立っていた。それは先週、テレビで見たヨーロッパの古い商店街に似ていて、どれも可愛らしい作りのお店がずらりと並んでいた。幸いまだ早目の登校だったため、まだ時間がある。適当に散策して元の通りに帰ろう。しかし、10分あるいてもメイン通りには出ない。困り果てていると、目の前の店の「Open」の看板が見えた。美鈴はとりあえず、この店で道を聞くことにした。

カランカランと鈴が鳴る。

「いらつしやいませ。」

透き通るような柔らかい声が出迎えた。声の主は可愛らしい奥様といった感じの女性だった。

「あの、道に迷ってしまつて・・・メイン通り、どう行けばいいですか？」

「あらら、そうなの。じゃあ、手を出して。」

「はい？」

「いいから。手を出して。」

美鈴は言われるまま手を出した。すると、彼女は何かを握らせた。

「ふふつ、おまじない。これを握つたまま、この店を出て右にまっすぐ、五軒目に青い屋根のお店があるわ。その脇にある小道をまっすぐ行くとあなたの行きたい所につくわ。それまで手を開いちゃだめよ！」

「はあ・・・」

「さあ、行つて、でないと学校に遅れてしまうわ！」

美鈴はわけのわからないまま、女性に従つて店を出た。右に五軒かぞえて歩いた。確かに青い屋根のお店がありその脇に道があった。美鈴は警戒しながらもその道を進んでいくと、自分の学校の正門に続いていた。美鈴ははっとして手を開いた。

「え?! ビー玉？」

手から出てきたのは空色にキラキラと輝いた丸い小さなビー玉。

「何あの人・・・」

キンコーンカーンコーン

学校の用例が鳴って我に返ると、スカートのポケットにビー玉をしまい、急いで教室へと向かう。そして、美鈴はこれから不思議なことがつぎつぎに起こり自分の人生を変えてしまうとは思ってもいなかった。

1・ビー玉の縁

ざわついた教室から窓の外を眺めほうとため息をつく。

「美鈴、どうしたの？」

と、いかにも遊んでまーすといったギャル風な女子高生が話しかけてきた。それに続いて、お譲さま系と可愛い系のギャルも近づいてくる。

「別に・・・退屈だなと思って。」

「だったら、一緒に来なさいよ。」

そして、またふうと息を吐くと三人の後についていく。三人の同級生、朝井に神埼に久城は本当に成金資産家のお嬢様でプライドも高い。なぜか自分は彼女たちに気に入られてしまった。彼女たちは後輩でいかにも気の弱そうな子を捕まえると校舎裏へまわった。彼女たちはその子を壁に押し付けて取り囲む。そう、いわゆるいじめつてやつ。美鈴は後ろからただ見ているだけ。この三人を敵に回す勇氣はないし、だいたい、興味もない。後輩の目からはどんどんと涙があふれる。美鈴は他人事みたいにそれを眺めるだけだった。

「何をしているの？」

と、声がかかり、振り向くと美鈴の幼馴染で、通称「地味女副会長」の冬木瑠璃が眼鏡を光らせて、腕組みをしながら立っている。

「うち。地味女が・・・」

朝井はそう瑠璃を睨めつけると諦めたように後輩からのいて、顎で他のメンバーについてくるように合図する。二人ともそれに従う、美鈴も、それについていく。瑠璃とすれ違う。

「高瀬さん、落し物よ。」

はっとして、振り返ると瑠璃は手を差し出した。手の中には例のビー玉がある。

「どうも。」

「何故、あなたはこんなにも変わってしまったの？」

美鈴がビー玉を受け取ったと同時に瑠璃がぼそつと呟いた。一瞬みたその眼は悲しく自分に向けられていた。美鈴は居心地の悪さに目をそらした。彼女は小さく息を吐くとそつと後輩の元へ行き、肩を抱く。そして、瑠璃は後輩を保健室の方へ連れ行く。美鈴はその後ろ姿を見つめていた。瑠璃と話さなくなったのはいつからだろうとぼんやり考える。その時、昼休み終了のチャイムが鳴り、われに返り再び教室へ急いだ。

学校帰り、ボーとしながら交差点を曲がると思いきり人にぶつかった。そして、インパクトが強すぎたのか、後ろにバランスを崩して尻もちと手を同時についてしまった。ぶつかった人はグラマーで大柄な北欧系の美女だった。

「ああ、ごめんね。だいじょうぶ。」

「はい。平気です。」

「あら、だめよ。血が出てるじゃない。いらっしやい。」

「だ・・・だいじょうぶです。」

「だめよ！女の子なんだから、大事になさい！」

美女は強引に美鈴の手を引っ張って歩き出す。そして、脇の小さな道にすいすい入っていく。そして、気がつくとも今朝見た不思議な商店街に来ていた。混乱しながら彼女についていくと、またもや今朝、入ったお店にどうどうと入っていく。このときはじめて美鈴は店の看板を見た。

「浅香、いる？」

「主は今、出かけておりますが。メリーナさん、主はたぶん夕方には戻ると思いますが。」

お店には今朝会った女性ではなく、正反対のボーイッシュな女性があテンドしていた。よく見ると左側が喫茶コーナーになっている雑貨店のようだ。

「私の不注意でこの子の怪我させちゃったのよ！浅香に手当を頼みたかったんだけど・・・」

「私でよければ代わりに。」

「そう？じゃあ、おねがいね！？」

ボーイッシュの女性は美鈴を手招きでカウンターの中に招き入れた。

「そこに座って、掌を出して。」

「はい。」

彼女はカウンターの戸棚から黒い小箱を取り出すと、赤い不思議な液体の入った小瓶を取り出す。蓋をあけ、綿にその液体を湿らせる。そして、そっと、すりむいた掌に塗っていく。最初はピリツと衝撃がはしたが、それは一瞬で、液体は優しく肌に吸収されていっ

た。ひんやりとして心地良い感触だった。

「あんた、名前は？私は東野柚月。」

「高瀬 美鈴です。」

「へえ、いい名だな。さてと、手当は終わり。明日にはきれいさっぱり治ってるさ。主の薬の効き目はつぐんだからな。あたしが保証する。」

「はあ。ありがとうございます。」

「ねえ、私の存在忘れてない？」

と、グラマー美女は話に割り込んできた。

「私はメリーナ・マッカーサーよ。よろしくね、美鈴ちゃん。」

「はあ。」

「もう、連れないわね！レディーはそんなじゃだめよ！そうだね、美鈴ちゃんもここで働きなさい。」

「は？」

「そうだな、今日は平和だが、最近忙しいし。あんた、人生において心あらずって感じだから、明日からまたおいで。主には私から話しておこう。」

「あ・・・あの。」

「美鈴ちゃんそうしなさいよ。ぜったいにあなたの人生の転機が訪れるわ！持つてるんでしょ、ビー玉。」

「え?!」

「ここに迷い込んだ人はみんな持つてる。ここを自由に歩き回るパスポート。ほら、あたしも持つてる。」

そして、柚月さんは同じ空色をしたビー玉を見せた。そして、柚月はちらりと時計を見た。5時を過ぎていて主も帰る気配がない。

「さてと、私のシフトはこれで終わり、メリーナさん、あとよろしく。」

「はいはい。」

「じゃあ、送っていいこう、まだ道わかんないでしょ。」

美鈴は柚月の後を付いていく。凜としたまっすぐ伸びている背筋、長い四肢。サラサラの髪はショートカットでかっこよくまとまっている。来ている服もセンスいい、さわやかなパンツスタイル。彼女は背が高いせいかモデルか宝塚の女優といってもいいスタイルでいわけがつかないいいおねえさま系である。話し方も切れよくきはきと書いて話す内容も知的で興味がそえられるようなものばかり。去年の今頃から彼女はあそこで働いているらしい。元は帰国子女で、ほとんど日本で暮らしたことはないそうだ。美鈴は不思議とすぐに柚月と打ち解けて、携帯とメール交換し、明日は学校近くのロータリーで待ち合わせをして店に行く約束をした。柚月は久し振りの楽しさに胸を躍らせながら、家へ帰った。そして、いよいよと彼女の運命の歯車が回り始めたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1783n/>

Metamorphose

2010年10月10日02時01分発行